【広報文化財コラム「一宮の歴史特集」】⑬

平成30年4月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
①加納家と一宮のかかわり

2019年2月、元一宮町長で多大な功績を残した加納久宜公の没後100年を迎えます。今号から「加納家と一宮」と題したコラムを連載します。

一宮の発展のターニングポイントの一つとして一宮藩の成立が挙げられます。文政9年（1826）、伊勢国（現三重県）八田藩主の加納久儔（1797～1847）が一宮に陣屋を建設したことから、一宮藩が誕生しました。

そもそも加納家と一宮のかかわりはいつから始まったのでしょうか。

江戸幕府の8代将軍・徳川吉宗の側近・加納久通（1673～1748）は吉宗が紀州（現和歌山県）藩主だった頃からの家臣で、吉宗の将軍就任とともに幕府の中枢に列するようになります。その功績は大きく、享保11年（1726）に一宮本郷村を含んだ、上総国長柄郡などを与えられます。この時から加納家と一宮の関係は始まります。

当初、加納家の陣屋は伊勢国の八田にあったため、「伊勢八田藩」と呼ばれ、一宮地域はその所領の一つでした。その後、久堅、久周、久慎と代がかわり、先述したように久儔の代に一宮に陣屋が建設されて一宮藩となりました。

一宮藩成立後は、久徴、久恒とつづき久宜の時に明治維新を迎えます。歴代の藩主は多くのことを一宮にもたらしました。一宮の近世の発展は、加納家なしには語ることはできないのです。

▲「加納家系図」（「加納家史料」より、町教委所蔵）
一部抜粋、右に「久通」が見える。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

平成30年5月号

一宮町の歴史特集
「加納家と一宮」
②加納久宜と一宮町政

加納久宜は上総一宮藩最後の藩主で、晩年には一宮町長に就任、一宮の近代化・発展に大きく寄与した人物です。

町長に就任したのが、明治45年（1912）。退任が大正6年（1917）のため、その町政は約5年間のみでしたが、久宜は就任以前から一宮のために様々な活動をしていました。

町長就任以前の明治42年（1909）、久宜は時の町長・飯塚総十郎に「町是を定め置くべきの議」という提言書を提出します。

これは全14条（内容は13条分）に及ぶ当時の一宮町が採るべき政策をかかげたものです。それらを要約すると、①駅から海岸への道路の建設、②一宮川河口の改修、③松林の保護、④高級旅館の建設、⑤公園整備と洞庭湖の整備、⑥一宮川の桜の保護と整備、⑦農産物等を扱う組合の設立、⑧簡易図書室の設置、⑨一宮病院の設立、⑩一宮小学校に附属幼稚園を建設、⑪学校へ行く町民への補助、⑫物産品評会の開催による産業の振興、⑬街灯の設置、など教育・産業・観光・福祉に至る多種多様な政策が盛り込まれています。実際、この中には久宜がのちに実現したこと（一宮病院の設立など）もあります。

久宜はこの提言書の中で、自らの提言を「百年の長計」とし、一宮を「日本帝国の一ノ宮町たらしめる」ための政策である、としています。久宜は一宮の未来のため、自らの経験と知識を生かして積極的かつ精力的に、様々な問題に挑んでいたのです。

▲ 加納町長時代の一宮町役場（現観明寺境内、『一宮町史』より）

【問合せ】教育課 ☎(42)1416